



大阪市立大学
工学部同窓会

大阪市立大学工学部同窓会報 第3号

同窓会だより

1982年11月30日
大阪市立大学工学部同窓会
〒558 大阪市住吉区杉本3丁目
3-138 TEL06(692)1231(代)
発行人 井田憲治



文化交流センターと地下鉄

同窓会々長 井田 憲治

話題の多かった1982年も終盤となってまいりましたが、大阪市立大学をとり巻く環境も一段と厳しさを増すことが予想されます。こうした中でこの秋に大阪市立大学文化交流センターが大阪駅前第三ビル内に開設されましたことは、本大学の今後の発展に大きく貢献することでしょう。新聞報道によれば大阪市立大学はその前身時代から庶民の大学としての地歩を固めてきましたが、最近その影が薄れてきたと感じられるこのときに、この文化交流センターの開設は、再び大学と市民の絆をとり戻す恰好の場所を提供するものであったとありましたが、そうした意味からも、大学も市民も利用しやすい運営を希望するものです。場所も大阪駅に近く、四通八達した地下鉄を利用すれば簡単に訪れることができるのは喜ばしいことです。

地下鉄と云えば、大阪市ではその延長が90kmを超えたようです。地上での車の洪水を尻目に高速で大量輸送できる地下鉄網は都市にとって不可欠でしょう。大型ビルのエレベータと同じく大都市の人々の移動のための横引きのエレベーター、即ち地下鉄は近代都市形成の1つの要件となってきました。今、大都市では盛んに地下鉄工事が行なわれているのも頷けます。しかしながら地下鉄建設には1km当り2~300億円という巨額の建設費を要するため、おそれと建設できるものではありません。こうした点から御堂筋線はその規模と格式の高さからみて、建設当時の先人の決断と偉業に畏敬の念を禁じ得ません。

ある人が対談で云っておられました、地下鉄に乗っている限りでは外の景色は暗闇であって、景色のないところに文化はないと。あるのはけげんばしい色彩の多数の広告だけと。たしかに大阪の地下鉄は広告が多く目につきます。赤字を少なくするためのなりふり構わぬ商法に大阪人の才覚が窺われます。

しかし、地下鉄にも文化が生れることを信じています。なぜなら多くの人々が互に顔を合せ、知己が生れ、談笑できる場となり、ここから庶民の知恵が湧いてくるのではないのでしょうか。地下の文化と地上の文化の交流が、冒頭で述べた大阪市立大学文化交流センターで花開くことを心から念願するものです。(土木 昭和30年卒 神戸市交通局参事)



(大阪市大文化交流センター)
大阪駅前第三ビル16、17F)

同窓の皆様へ

名誉会長 三瀬 貞



我が国の内外の情勢には、なかなか厳しいものが感じられる昨今であります。これからの日本を背負って行く若い技術者や研究者を育てて行くわが工学部にとっても、教育・研究の面でさらに一層の努力が社会から要請されてくることになるでしょう。都島工業専門学校が創設されて来年で40年になります。創立以来100年を越えた大阪市立大学の中では比較的若い学部であるだけに、これからの飛躍が期待されているといえましょう。

本年3月末日で、北浜安夫・竹屋芳夫両教授が定年退職され名誉教授となられ、それぞれ電気通信大学と中部工業大学の教授になられました。これで本工学部関係の名誉教授は11名となられました。吉永知之事務長も同じく定年退職され、羽衣学園、短期大学の専務理事になられました。新しく桑田孝恒事務長が経済学部から着任されています。

本年3月末日で、北浜安夫・竹屋芳夫両教授が定年退職され名誉教授となられ、それぞれ電気通信大学と中部工業大学の教授になられました。これで本工学部関係の名誉教授は11名となられました。吉永知之事務長も同じく定年退職され、羽衣学園、短期大学の専務理事になられました。新しく桑田孝恒事務長が経済学部から着任されています。

昨年9月13日 永井荘七郎名誉教授、本年8月9日 古市亮蔵名誉教授が亡くなられ、ともに正四位勲三等旭日中綬章の追贈がありました。

昨年11月3日に三戸左内名誉教授、本年4月29日に鬼武信夫名誉教授に、勲三等瑞宝章の叙勲がありました。

本年4月1日より応用物理学科固体物理学講座がレーザー工学講座となりました。さらに本年4月1日付で上田祐男教授、小田一紀教授、村井昭教授、昨年10月1日付で北田俊行助教授、国枝紀夫講師、本年10月1日付で鈴木裕講師、正垣誠三講師、南斎征夫講師がそれぞれ昇任されました。一層の御活躍を期待したいと思います。

本年で、工学士4766名、工学修士1013名、工学博士227名（課程105名、論文122名）となり、名分野で活躍されています。

大阪駅前ビル第4棟に、100周年記念事業の一つである文化交流センターが10月に開所され、種々の行事が企画されていますが、理科系の工作センターも開設に向けて準備が進められています。

この工学部のようなごちんまりとしたところで、細分化し、先端化してゆく技術革新の中を、如何に研究し、教育してゆくかむつかしいところですが、基礎的な事柄を徹底して教育するとともに努力してゆきたいと思っています。
(工学部長、土木工学科教授)

創設時を顧みて

藤井 太一



工学部史の編集が数年前から始まり、古い資料の見直し、卒業生の皆さんの思い出の聴取りなどに努めている昨今であるが、執筆のむつかしさを今更のように痛感しています。楽しかった思い出、つらかった思い出など盡きるところがなく、30数年の来し方を思い起しております。

私が工学部の前身である理工学部を採用されましたのは昭和26年11月でありました。当時の機械工学科は発足して日なお浅く、国鉄環状線天満駅近くにあって、大阪市立工業研究所の建物の2階の西北隅の部屋に本據を構えていました。吉本源之助先生を中心に書棚を間仕切り代りに並べて、新境地開拓の意気込みで、研究や討論も熱を帯びて時間のたつのを忘れる位でした。その当時の理工学部は、理を基礎にした工学を看板に掲げ、ユニークな存在として注目を受けていましたが、環境は現在とは比べものにならない位の粗末な状態でした。いつの世でも活動の源は意欲と財政的に恵まれていることだと思いますが理工学部創設の時は、この両者が略々満足されていたようです。すなわち、昭和24年度の予算は2203万円、25年度は3189万円で、1講座当りでは77万円、94.5万でありました。当時の物価と現在の物価とを比べて見ますと、此の金額は700万円位になるのでないでしょうか。然し、その後、ジェーン台風、税制変革などの影響を受けて急激に減少し、耐亡の時代に突入し、昭和34年に理工分離、工学部創立となります。人間の一生の節目も10年毎に巡ってくるといわれていますが工学部の場合も更に10年後に杉本校舎移転という、大きな転機を迎えました。規模は小さいけれども、バランスのとれた総合大学の工学部の態勢を備えたわけですが、学園紛争の時代になり、今や次の節目を迎えようとしています。

機械工学科の卒業生も1000名に近づき、就職も極めて順調に進んでいます。卒業生の皆さんの活躍に負う処が大きいと思っています。

「温古知新」といわれていますように、創設時の燃えるような意気込みを思い出して、高度化し、細分化し、ともすれば人間性を失い勝ちな現状を見つめ直して頑張りたいと思っています。
(機械工学科主任教授)

訪中雑感

安藤 慶一



日中国交正常化十周年に当る今年の春、大阪—上海学術交流計画の一環として上海科学技術大学で講義をするため訪中致しました。たまたま機械工学科の東野一郎教授も同じ大学から講義のために招聘されておられましたので一緒に渡航することができ、連日の講義に追われながらも楽しく過ごすことができました。ここに中国滞在中の思い出と、印象の一端を述べさせていただきます。

上海に着いて土曜日の夜、私達は上海市高等教育局副局長の余立先生主催の歓迎パーティに招かれました。

パーティーは静安賓館という、ややクラシカルな感じのする落ちついた洋館で行なわれました。真紅の緞子を敷きつめた、あまり広くない廊下を通り、昔日を思わせる狭いエレベータで数階上がって踊り場に出ると、そこに余立先生はじめ多数の方々が出迎えて下さいました。私はここで初めて、「初次見面。清多关照」（はじめまして。どうぞよろしく）と出発前につけ焼刃で憶えた中国語で挨拶をしました。そのとき余立先生が何と答えられたか全然記憶がありませんが、宴が始まってしばらくしてから余立先生のためわく、「安藤先生には初めて会ったような感じがしない」と。とっさに中国語で挨拶したことに対するお世辞であることに気付いて赤面の思いをしましたが、嬉しいお世辞でした。

上海科学技術大学は上海市街地より自動車で約40分のところにある田園都市のはずれにありました。全寮制で大学キャンパス内には若手教員用宿舎や学生寮があり、大学より徒歩で10分程の所にも一般教職員宿舎やゲストハウスなどが立ち並んでおりました。毎朝6時には大学構内からクラシックの洋楽が大きい音で市内に流れ、その日の活動が開始されていました。小学校や中学校では僅かながらも授業料を納めるそうですが、大学は完全に無料とのこと。その代わり禁酒、禁煙で、しかもこの大学ではエレベータにも乗ることができません。大学教育にかけるきびしい姿勢がひしひしと感ぜられました。

中国では古くから「上有天堂、下有蘇杭」という言葉があり、蘇州と杭州は地上の楽園として知られております。春秋時代の呉王・闔閭の墓と伝えられている蘇州の虎丘は日曜でもないのに観光客で満ちていました。

ほとんどが中国の人々でしたが、ガイド嬢の話では毎日のように日本人がやって来るとのことでありました。小高い丘のなだらかな石段を登りつめると闔閭の遺体とともに3千本の剣が埋められたという「虎丘剣池」や、千人の殉死者が白骨と化して墓前に座ったという「千人石」

があり、その後方に約千年前に建てられた「虎丘斜塔」が15度程傾いて立っていました。私達はガイドに勧められるままに見晴らしの良い場所に建てられた木造の静かな休憩所に入りました。そこには紫檀や黒檀で作られた立派なテーブルなどが置かれ美術品が展示されていました。そこは主として外国人観光客用の施設らしく、豪華な中国の椅子に座り、静かにお茶を飲みながら旧跡の歴史を偲べるように配慮されており、外国との友好に力が注がれていることを感じました。

杭州は蘇州に比べると明るく、数段美しい町でした。蘇州に首都をおいた呉と抗争を繰り返した越の首都である杭州との間には雰囲気的に大きい差があるのに興味をおぼえました。中心部に詩人・蘇東坡や白居易がその美を愛でた西湖があり、その周辺に名所旧跡が点在していました。靈隠寺は西暦326年に開山された禪宗の古寺ですが、多数の老若男女が参詣していきまして、高さ24メートルの大仏像の前は顔づく人で埋まり、通り抜けるのにも一苦労をする程でした。新しい中国にも昔ながらの仏教的風土が失われていないことに何故か安堵するものがありました。また西湖の岸辺にある南宋の武将・岳飛を祭った岳王廟も、その日は田舎から練りだした観光の人々で混雑しておりました。廟内には岳飛をぞん訴して死に至らしめた政敵の奏桝らが後手に縛られて座している像や、岳飛に協力した幾つかの忠臣の像がありましたが、人々は次々と奏桝らの頭を平手でたたき、忠臣像の顔をやさしくなでているのです。この光景の素朴さに、私はこうした勧善懲悪の思想も、中国の人達を支えている一要素ではなからうかと興味深く感じました。

上海市は周知のように現在は人口が1,132万余人の世界一のマンモス都市であり、中国における商工業の一大中心地ですが、確かに、上海の外灘から揚子江に至るまで黄浦江を船で下れば、その沿岸の景色は大工業都市にふさわしい風格を示しておりました。また門前に「独立自主、自力更生」と大書された上海工業展覽館には上海の工業新製品の粋を集めて展示しており、世界的水準の製品も多く見受けました。しかし観光地や遊園地でのスナップ姿に見かけられるカメラは殆んどが我国ではつとに巷から姿を消している箱形の2眼レフであることから推察されますように、民生用機器の普及は経済的理由によるのでしょうか低く留まっております。

ところで、滞在中私には二人の通訳がついて下さいました。一人は講義、他の一人は生活面の通訳で、お二人共に半導体関係の研究をしておられる若い教員の方でした。日本語の勉強はわずかに一年だそうですが、通訳は正確で、ただ感腹するばかりでした。現在の中国における外国語は英語と日本語が主流となっているようです。通訳して下さった方々は日本留学志向であることは申すまでもありません。学術交流は今後益々盛んになるもの

と思いますが、日中2000年の歴史を思い浮べますとき誠に感慨深いものがあり、友好関係の発展を祈念しております。
(電気工学科主任教授)

感 想

成瀬 哲生



私は昨年4月、建築学科に着任しました。1年半しか市大には在籍していませんが、本年度の学科主任ということで、同窓会だよりの投稿を依頼されました。未だ日時が浅いので、私なりの感想を述べることで責を果たさせて頂きま

す。
私は大学卒業後、九州大学、近畿大学を経て3度目の勤務です。丁度国立、私立、公立と経験することになり、それぞれの大学の違いを肌で感じています。したがって、市大の研究・教育の特色を生かし、大学のより一層の発展に微力をつくしたいと思っています。

市大のキャンパスで、最も気に入ったものは、樹木の予想外に多いことで、特に本部館の前庭のワシントン椰子やフェニックス・蘇鉄の類が印象的です。また運動場の間の道の両側のポプラ並木は、散歩するに絶好の眺めです。広い運動場の片隅で、学生の競技をなんとなく見るのが好きですが、カラーが派手なユニホームの学生が仲良く運動している風情もなかなかよいものです。しかし、近くで見るとピンクのユニホームは、むしろ男性が着用していて、近年の学生気質がうかがわれます。

学生の就職の担当をしていますが、一般の風潮にたがわず、大部分が大企業志望です。求人数も比較的多く、直接求人のために訪ねられた卒業生諸先輩の要望に応じられず、申訳なく思っております。58年3月卒業予定の学生は、共通1次の試験を受けてきた最初の学生です。安定志向第一とかの世評もあるのですが……。同窓生の皆様の御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、学科の諸先生には、この1年は特別に変化はありませんということです。

(建築学科・主任教授)

訪 中 雑 感

木下 雅悦



北京大学の招きにより第2回中日ラジカル重合シンポジウムに参加するため、5月の2週間、中国を訪問した。学科主任が海外出張するのはきわめてまれであるが、第1回シンポジウムが昭和54年に大阪で開催された時から準備されて来たものであるから任せて参加することにした。市大では理工学部創設時以來ラジカル重合の研究が活発に進められて来たため、日本側参加者12名の中には、井本稔名誉教授、大津教授はじめ市大関係者が多かった。

シンポジウムは北京市北西部の文教地区にある友宣賓館会議場で催された。中国語、日本語、英語が入り混った講演であったが、中国語を日本語に通訳するのは恥ずかしながら全て中国の方であり、中国から日本に来られる時には通訳同伴であるのとちぐはぐである。中国側参加者はかなり年輩の方と若手に分かれていた。大学院は最近創設された修士課程の修了者が博士課程に進学する段階にあり、学制の面では昭和30年頃の市大に似ている。

研究教育設備は未だ充分ではないが着々と充実されつつあり、図書館は学生でいっぱいである。理工系の学科編成は丁度市大の旧理工学部を大きくしたようで、同様の理念で運営されているのであろうと共感した。清華大学および上海の復旦大学も見学したがほぼ同様であった。中国科学院の研究所ははじめ各大学では昭和30年代の日本のように新改築が盛んである。願わくば後に続くかもしれない高度成長期の放漫と失速期の悲哀は回避されたいものである。

御存知のように市大では古くから中国研究が盛んで化学関係に限ってみても昭和30年代から交流があり、何回かにわたり招待を受けて当時の中国を訪問されている。もともと巾広く全国の代表が招かれたのであるが当時は国家公務員の中国渡航は許されなかったので、結局市大中心の訪中団になった由である。中国を代表する大学と、とかく国立第一の自由主義国の一公立大学とがシンポジウムを通じて交流する基盤はその頃から培われつつあったのである。大学とは一体何なのかを考えさせられるいきさつである。大阪市立大学に学んだ者として今一度この問題を考えてみようではないか。

(応化昭和32年卒・応用化学科主任教授)

園田 恵一郎



先般、名古屋大学で開かれた土木学会年次学術大会に出席した教員、卒業生諸氏約50名が名古屋駅前のターミナルホテルの一室に集い、和やかにかつ盛大に都土木学会・市土木会の懇親会が開かれました。このような会は、一昨年

の札幌での学会から始まり、広島に次いで3回目になりますが、いずれもそれぞれの地方で御活躍の卒業生や旧教員の御厚意により会の運営が図られています。年々盛大になるのを見るにつけて卒業生の母校への愛情と関心の大きさをしみじみ感じる次第です。

社会における私達の大学の評価を最も直接的に感じるのは、3月の入学試験の成績集計の時と、丁度今頃の4年生の就職内定状況を眺める時であります。今年の4年生は共通一次学力試験を受けて来た最初の学生です。卒業生諸氏からもこの制度の影響についてよく尋ねられますが、正直に言って分かりかねています。確かに、今年の4年生は学習態度が悪く、成績も芳しくなく、大量の留年生を出す結果になりましたが、3年生を見てみると必ずしもそうではありませんので、もう2、3年待って見ないと明確な答えを出せないように思えます。この世に、完全無欠な入試制度などは存在するはずがありませんが、全国受験生を一つの物差しで計り、序列化してしまうこの制度は、学生の意識を硬化させ、多様化する社会で活躍できる技術者の育成に対しては、弊害をもたらせるのではないかと危惧しています。それだけに学部における4年間、大学院における2年間での広い視野からの技術者教育の必要性を痛感する次第です。

最後に、最近の教室の動きについてお知らせ致します。4月に河海工学の講座担当教授に小田一紀助教授が昇格されました。これで6人の教授の内4人が卒業生になり、いよいよ2世の時代に入った感があります。大学の活性化は若い人達の活躍なしには不可能です。幸い、当教室の教員は比較的若く、活気に充ちていると思います。例えば、この4月から10月までに7名の方が国際会議での研究発表等の目的で海外出張されました。また、来年3月からは中井教授がサンパウロ大学へ交換教授として出かけられる予定です。今後共、皆様の御支援をお願い申し上げます。
(土木工学科主任教授)

大倉 照



応用物理学科に、大東俊一、川村 肇、三戸左内の教授の率いる三講座より発足したものである。川村教授は、教室創設の理念を「量子力学とエレクトロニクスに堪能な卒業生を社会に送る」ことに定められた。このうち量子力学

は、川村教授の御担当で、「固体物理学」なる講座をひらかれた。60年代の初頭でこのような卓抜した理想をかかげた学科は全国的にも珍らしく、大阪市大の一つの特色となった。今回、日米半導体戦争なる話を生むまでに成長した日本の半導体工業が固体物理学をその基礎においているとの認識からすれば、川村教授の御先見は感服の至りである。私は、江崎玲於奈氏がまだ無名の頃、学会の開催前によく川村研究室を訪ねて講演内容の研鑽をしていたのを思い出す。江崎さんの来訪は、学会で川村教授の質問に辟易するよりも予め意見を徴するに如かずでの判断からである。後年ノーベル賞となった Esaki diode の idea が、当時の市大の黒板の上に躍っていた。

この由緒ある講座が、本年三月廃止されたのは残念なことである。因に、私の「量子物性工学」は、量子現象の物性工学化を目指したものであるがその濫觴は、川村教授に溯るものである。応用物理の物性工学を専攻して学窓を離れていった同窓生諸君は、十分に負荷の大任を果されている御様子であり慶賀の至りである。「如是我聞」の一端を御披露すると、まづ、邑瀬和生君(S、36卒)は、若冠41才で大阪大学理学部物理教室の教授に就任し、伝統ある講座の後継者となった。半導体物理学の世界的権威として知られている。同教授には昨年度より非常勤講師として御足労ねがっている。松下電器の上村剛博君(S、50、修)に、Video 撮像管の開発で本年度の社長賞の栄に浴した一人である。三戸教授の御縁の深いシャープでは、栗根昶君(S、35卒)が半導体研究所副所長である。

富士通研究所の藤原孝雄君(S、45、修)は、GaAs系半導体レーザーの30年の長寿命化に成功し、光通信の実用化に大きく貢献した。三菱電機の菱井正夫君(S、47、修)はCO₂レーザーの高出力化に挑み、精密機械工作へのレーザー応用の途をひらいている。このような、Success story に余り歓迎されない傾きもあるが、同窓紙に卒業生の活躍ぶりをするすのは、一つには市大工学部の研究・教育の成果の確かさを誇示することにもなる。あえてその一端を紹介したわけである。最後に、同窓会諸君の御健斗を祈って止まない。

(応用物理学教室主任教授)

秋山 高治



機械を31年に卒業した我々が、25年を記念して、集ったのは昨年の5月24日でした。卒業生37人中（今は亡き林一雄君も含む）25人の懐かしい顔が、天王寺駅ビルのホテルに会し、旧交を温めるうちに、意気軒昂、青春時代の再現を

謳歌しました。おいでいただいた8人の先生方とともに、記念写真を撮りましたが、そこには、今夏、逝去された古市先生のお姿はすでに見られず、寂しいかぎりでした。

思いかえしてみますと、私が最後に先生にお会いしたのは、それよりさかのぼることちょうど4ヶ月、1月24日のなにわ会館における、古市先生叙勲パーティーの席で、心からお慶び申し上げた時のことでした。あのときは、とてもかくしやくとして、はればれとしたお姿でしたが、直後に病魔にとりつかれたご様子、わずかの合間に他界されました。ご遺族にとっては勿論のこと、いわば、市大での古市研一期生の私共にとりまして、先生は教え子達の魂をつなぐカナメとして、大切な存在であつたと思います。

古市先生との出会いは、我々の卒論テーマを決めなければならない新学期も少し過ぎた頃、名大から赴任してこられた時に始まりました。いよいよテーマも決まり、扇町の学舎での先生のご研究も、はやばやとスタートするわけですが、実験設備となる旋盤や直流発電機などの据付けを我々が手がけたり、日曜大工よろしく、鋸やカンナを使って、手作り実験道具を完成したり、充実感あふれる日常でした。

切削剤の再現性のない噴霧量に首をかき上げる日々が続く、原因をいろいろ調べたあげく、エアータンクのドレン抜きから、馬の小便ほどの量の水がほとぼり出て、解決した驚きや、切粉が瞬時にして錆びるのを、目の当りにしたことなどは、今でも新鮮な経験として印象深いものとなっています。先生の講義が、最後はどこまで進んだのか、なぜか濃い記憶はなく、ただ、毎日、研究室を退出するときに唱えた、「ガス・水道・電気・戸締り」の古市研究の呪文は確と憶え、今もって、我家でも、外出や就寝時には唱えて、家内安全に役立てております。

ユーモアのある皮肉まじりのからかい上手の先生にまつわる話は尽きませんが、当時の私共にとっても、昨今とは様相はちがえ、就職難と云える時代でした。終りに、大変お世話になったことをお礼申し上げ、先生のご冥福とご遺族のご多幸をお祈りいたします。

(機械・昭和31年卒・川崎重工業(株)・大阪工場機械設計課長)

嶋 経夫



ある新聞の文化欄を見ていたら、昭和軽薄体という「時代の気分を表す文体」のことが載っていた。さらに、この文体を、もっともっと発展させて、ABC文体や123文体を、もくろんでいるのが、評論家の嵐山光三郎氏だそうである。

例えば、E (良い) 感じ、E (好い) 旅行のように、使L (エル) ので、R (アール) らしい。この調子で、ヤQ (キュー) のためのQ暇、とか、おいC (シー) B (ビール)、などと使うと、ゴロ合せを超えた文体になり、却ってNOW、E感じとなるから不思議である。

一方、バレーボールの小島監督によれば、女子のチームづくりは、夫々の個人の能力を、最大限に引出すために、若い女性もつ、個人個人の感性に最も、神経を使うそうである。なかでも「叱る」ことが、一番難しいものだそうで、彼によると、女性は、大きく二つの、典型的なタイプ、に分けられる。つまり、その一つは、常に大きな声をあげ、チームの士気を盛上げて、リーダーシップをとりたがるタイプ、であり、他の一つは、声も小さく、人の居ないところでも、陰日向なく、チームのことに心を配り、花を生けたりする。母性の強いタイプである、という。従って「叱る」とき、前者のタイプには、威厳をもって、強く断定的に、申し渡し、後者のグループには、優しく訴えるような、話し方をするのが、良いのだそうである。これが、チーム力を最大にするコツの一つであって、それはあたかも、調理人が、火入れの時間や砂糖や塩などの量とタイミングを、コントロールし乍ら、素材のもつ味を、最大限に引出す、調理の名人芸にも通ずるものようだ。

以上、二つのことは今の時代、若者の世代、新しい世代での事実である。一つは、変っていくもの、リフレッシュされていくもの、であり、もう一つは、本質として変わらないもの、熟していくもの、であろう。大学をでて長年実社会の活動に、まみれていると、研究職でない限り、次第次第に、所謂技術屋らしくなくなる、といわれることがある。しかし、それは、新しい情報、新しい技術の問題と、包括的な技術として、次第に熟していくものとの問題とに、分けて考えるべきであろう。つまり後者の方は、総合技術というか、システム技術というか、全体として、技術的ストックの出来るものである。それ故、医学で云う、研究医と臨床医の違いのように、現場「臨床」技術は、生長するものであるし、又そうでなければならぬと思っている。

土木技術を取りまく環境は、とても厳しい。ことに、

行政の重要な一環である。土木行政に於ては、市民福祉の向上をめざす。施設づくりが、生活環境保全に関する住民運動と、対立する場合が多く、適切な対応、明確な方式のないまま、そのケースごとに、模索している現状にある。

しかし乍ら、私達にとって将来は明るい。それは、所謂、10³産業（構成する部品の数）といわれる、自動車産業から、10⁴産業である、ロケット産業、人工衛星へと発展した科学技術は、情報化時代を迎えて、10⁵産業へ向っている。都市工学が都市経営の視点をも含めた、総合産業と見做すとすると、これは、10⁶や10⁷産業、いやもっと多くの部品産業になる筈である。それだけに、私達が挑戦すべきネタは、いくらでもあるわけで、云い換えれば、都市工学をめざす私達の分野は、ますます夢多き分野、つまり、まだまだ若い分野であることを込めて、NOW、E、土木、ということになるのではないのでしょうか。（土木、昭和31年卒、大阪市総合計画局技術監）

技術屋雑感

溝神 宏至朗



仕事の都合で出張することが多く、自然あちこちのホテルを利用する機会もふえて来るのだが、いつ迄たっても目覚まし用アラームセットの扱いに馴れず、神経を使わされる。目的から言えば、本来単純な機能であるのに実に種類が多く、ホテルごとに扱い方も微妙に変るのであるから、とても馴れたという状態には至らない。明日の仕事に直接かわる大切なことなのだが、BGMやフットライトなどと一緒にナイトテーブルとして組み込まれていて、一見、スマートなのだが、そのためにまぎらわしく、しかも文字が小さく手暗らがりときているから、先づ間違いないからいらしてしまふことになる。

激しい競争社会であるから、メーカーはできる限りの知恵を絞って良い製品を開発し、ホテルはホテルで安く良い品を選定しているのだろうが、単純だが大切な機能を他の二次的なものと、い、かげんなところで抱き合わせにしているから、ことは面倒になって来るのだ。

改めて眺めまわしてみる迄もなく、似たようなことが日常、随分眼に入って来る。大きなところでは、街の景観やそれを造る建物群をみてもそうだし、身のまわりの小物にいたっては本来の目的は何なのか、どうにも理解できないものも多い。

確かに、物の量が多く選択の機会が多いということは豊かで恵まれた社会であることの証ではある。多様なニ

ーズが新たな技術開発を促し、それがまた新たなニーズを呼び起すという因果関係が保たれて来たのだから、その限りにおいては素晴らしいことだったのだ。しかしながら一方では、高い附加価値を追求するあまり、肝心の性能はそっちのけで、手を変え品を変え、あげくの果ては見た目の格好良さが決め手になるといったところ迄、ことはエスカレートして来ているように思う。個人の好みで留まることならば、少々げても趣味であっても素知らぬ顔もできようが、枠を越えて多少なりとも社会性を帯びて来ると、そう気楽に構えても居られなくなる。

健全で快適な社会は常に良いものを正しく見分ける眼力を持っていなければならないのだし、少なくとも技術的成果はたとえ、それがどんなに小さなことであっても強い社会性を帯びているのだから、技術者は常に自らの眼力を養い、その眼力に耐えられなければならない立場にあることだけは確かなのだ。改めて自分の日常に冷静な眼を向けなければならない時が来ているように思う昨今である。

（建築・昭和36年卒・㈱安井建築設計事務所計画部長）

思うこと

村上 宏



先日、私用で杉本町の市大事務局をたずね、学内を散策した。夏期休暇中で人影が少なかったせいか、静かな、落ち着いたアカデミックな雰囲気がただよ、100年の伝統をもつ総合大学の風格が感じられた。卒業生として母校を誇らしく思った。しかし、我々36年度の卒業生にとっては、そんな杉本町学舎は教養課程の後半1年間のみで、あとの3年間は扇町学舎の南と北にわかれた薄汚れた古い建物で学んだ訳で（今は全くあとかたもない）教えを受けた諸先生、或は友の顔も扇町学舎と一つになっての想いが強い。あれから22年がたち、全員が元気で、夫々の分野で活躍していることを先づ御報告しておきたい。

ただ22年間の歳月はすぎて見れば極めて早く感じるもので、残念ながら応用物理学の諸兄と一堂に集まる機会を未だもって居らず、この会報を期に一度集まりたいものである。卒業後研究者、技術者として一筋に歩んで居られる方もあるだろうし、他の分野の仕事に取り組んで居られる方もあると思う。小生の場合は後者に入る様である。民間企業の場合は、どうしても基礎研究より商品化研究に重点が置かれ、大学の卒研テーマ或は出身学科と云う枠内で一つの方針を掘り下げて研究を続けて行くことは少ない。言い換えれば大学の4年間はあくまでも、物の考え方、技術的思考の素養を学んだにすぎず、

社会へ出てからの30年間に学ぶものの方がはるかに大きい筈である。数年前に応用物理科の修士課程在学中の後輩の入社面接に立合った時、彼の専攻分野はレーザー光線であり入社後これを生かせる職場はないと云う質問に対し、「これは僕のライフワークで日常の仕事とは別である」と答えていた。今彼は農業機械のエンジンを研究して居り優秀な技術者として評価されている。製品開発を行う場合は特に横断型技術と云うか広く周辺技術を身につけることが大切であり、固定観念が強すぎるとは弾力的な発想が出来ず、従って良い製品を生み出すことにつながらない。これからのメーカーの技術者の場合ユーザーのニーズの把握解析から技術評価、採算性更には、販売方法にまで通じていなくてはならないと考える。LSI等技術革新が益々進み中で、真空管を扇町から日本橋まで研究の合い間に買いに行った頃をなつかしく思う。

(応物・昭和36年卒・久保田鉄工(株)ビニールパイプ営業部開発課長)

海外技術援助



時川 和夫

年平均気温7℃の釧路から+20℃でも暑いジャカルタへ南下したのだから体調の方も少しはおかしくなるのもあたりまえだが、家族全員がどういふわけか元気なのはおどろきを感じている。子供二人はいずれも道産子、親の我々二人はどちらも関西大阪生れ、親の血をひく何とやらで赤道直下の生活も1年が過ぎたが、大した病氣もせず今日にいたっている。

当地ジャカルタには市大卒の人が20名近くもあり、先日有恒会の集まりに出席して文科系の先輩にもお目にかかり久々の交遊を深めたところであるが、土木卒では大坪俊郎君(39年)が現在日綿実業のジャカルタ駐在員として活躍、また川端英資君(43年)パシフィックコンサルタンツも当国の港湾建設に日夜精を出している。また今から5年ほど前には柳生忠彦君(41年)が当国海運総局に国際協力事業団(JICA)より水理土質の専門家として2年間派遣されている。世界もせまくなったと思うが、我が恩師故永井荘七郎名誉教授の教え子として、今後の日本の発展の要ともなる同胞インドネシア国に派遣されてきていることは、市大土木の発展のためものと受けとめられるが、この自負は自分一人ばかりのものではあるまい。とは言え最近技術援助のむつかしさを強く感じている。技術援助とは相互の理解がないことには話にならないのだが、この事が案外わかっていない。また技術屋は土地の行政、外交、政治、経済にも明るくなければ

ならない。これからの技術者は我国や外国からの信頼と期待がよせられておりそのはたす責任は大きい。

最近では東南アジアにおいて反日感情がどうのこうのと言われているが、国の成り立ち、歴史、構成人種、言葉や宗教の異なる人間がそんなに簡単に相互理解などできるものではない。まずは相互の存在の認識から始めるというのが物事のすじみちではあるまいか。日本人は忍耐力、突進力はばつ群にあってもどうも性急で短期決戦の性癖があるようだ。我々市大出が救われるのは、やはり何んと言っても関西人にしかない物事への単刀直入の取り組み方と、とことんまでやると根性ではないだろうかと思っている。小生も市大の卒業生として足跡を残したいと思っているが、後輩の皆さんも海外に目を見開いて大いに頑張ってもらいたいものである。

(土木・昭和38年卒・JICA 港湾専門家)

正月2日は道頓堀の半田屋へ

溝口 進



昭和41年卒業の機械と電気工学科の正式なクラス会は卒業10周年と15周年の2回、恩師をお迎えして行った。15周年は昨年5月行ったが多数の出席で盛況であった。今後も5年ごとに開催しようということになり、幹事は機械の東君電気藤沢君にお願いすることになった。

ところで正式なクラス会ではないが毎年正月の2日に集まれる者だけで集まろうじゃないかということで卒業以来クラス会を行っている。クラス会といっても特別な事をするわけでもなく、テッチリをつつきながら一杯飲んでお互いの近況を話し合うといった気楽なものである。

今年の正月で16回目を迎えたが、私の場合は家内も実家が大阪であり、昨年までは勤務地も大阪ということもあって現在のところ皆勤を続けている。昨年6月東京勤務となったが、今年は家族共々大阪へ里帰りして参加する事が出来た。今後も出来る限り出席して行きたいと思っている。毎年出席してきた私にとって正月のクラス会は、友達の近況を聞き、それぞれ勤務や行く道は違っても、それぞれの分野で頑張っている様子を伺い知ることが出来、自分も頑張らねばと正月の誓いの心を持つ日ともなっている。

ところで毎年正月に集まる場所と時間は連絡等の手間を省くため予め決めて有る。2日の午後3時大阪難波道頓堀ボウルコンパ前の半田屋(4F)集合である。10年来同じ店に同じ日、同じ時間に行っているため、半田屋の仲居さんもこちらの顔を覚えてくれている程である。

正月を大阪で過ごす諸君は是非出席してほしいし、正月

に大阪に来るといった事の出来ない諸君は少なくとも5年に1度の正式のクラス会には顔を見せてほしいものである。

(機械・昭和41年卒・松下電工(株)東京EC商品設計グループ担当主査)

アナログ世代の雑感

森井 征治 ✓



卒業以来16年、技術の推移は流星の如きスピードと華やかさがあります。真空管とトランジスタの同居期から超LSIの今日迄、弱電機器の設計担当者として、時代のニーズに引きずり回されてきた歳月と言えるでしょう。私が入社してすぐに、テープレコーダー(オープンリール)の回路設計を任された時の事は、今だに脳裏に焼きついております。社の組織は勿論、道具の在り場所もよくわからず、我社でのテレコ設計は初めてで、何から手をつけて良いのやら見当のつかない状態でありました。

在学中の奥田研で、奥田教授や渡辺先生、諸先輩に“なまけ者”故にしごかれた事と、こんな新入りに任じた者が悪いのだ”の聞き直りの精神が備わっていたのでしよう。上司や御得意先から、気が失せる程叱られながらも何とか完成した時の感動は、今はもう10数年前のちっぽけな出来事とは言え、終生忘れ得ないものとなるでしょう。現在も商品開発に携われるのも、この時の教訓が礎となっているものと確信しております。そういう意味でも諸先生方に愛のムチを大いに振るって頂きたいものだと思っております。回路設計の難しさは時代と共に変転し、ICの高集積化の現在では、回路設計そのものより、消費者の安全性、不要雑音等の外乱防止、静電気、雷、地域環境への配慮等、この様な面でのトラブルをなくした上でいかにコストが安く、品格のある商品を開発するかに比重が移って来ております。更にメカトロニクス時代と言われる様に、私は電気担当、私は機械と言って他分野に耳目を塞がず、専門外の知識も求められて来ており、その混在した商品を開発して、企業にも、社会にも利用をもたらすかは、その担当者各人の日頃の精進に大きく左右されるとも言えるであります。技術セクションも変貌を遂げつつあります。ポスト不足の時代です。一つのセクションに“長”の肩書きのつく人が二

人以上というのが珍しくなくなってきました。従って専門職と管理職の二分極化が我社のみならず他社でも実施されてきています。しかし、四十才、五十才になって急に一つの分野のエキスパートになって、より深く探究し、その成果で会社に利益をもたらすのは至難の業です。かつての“ヴェテラン”のもつ“古兵者”の語義が“老兵”と化しつつあるのです。けれども企業動向は、その存続性故に、確実にこの方向に向かってるのが現実です。更には、マイコン時代の加速期です。

新入社員が苦もなく、こなせる技術には、アナログ時代の私も閉口している状態です。然し乍ら一方では、各国との競争の為の競争とも思われる技術革新、そんなに先を急ぐ事が必要なのだろうか。開発担当者が本意乍らも社命故に虚飾性のある商品を開発している事もあるのではないだろうか。ロマンに満ちた研究が、実は悪夢への過程にならないければ良いが、という思いがよぎる事もあります。現実には、私も及ばず乍ら青春真只中と自負し懸命にパスに乗り遅れまいとしております。

さて一般に、人間、己を失わず、生き生きした生活を送りたいものです。私の周囲、あるいは私自身に照らしてみても(私の反省も含めて)、大学での過し方、学ぶ事以外に、クラブ活動に打ち込み、交遊を広げ、本を読む、こういった事の密度が社会人になってからのその人の生き方、その人となりの形成に大きく関与する事をつくづく感じております。在学中は、極言すれば一講義単位が生活サイクルでしたが、この10数年間は商品開発期間(6ヶ月~1年間)が生活サイクルとなり、その年月の過ぎること、正に“光陰、流水の如じ今後、流水益々速くなるうとも、童にも似た冒険心と素直さとそして非常識さを持ちつづけ邁進する所存でございます。

在学生諸氏、先輩諸兄の益々の御活躍を祈ります。

(電気・昭和41年卒・ムネカタ(株)技術部係長)

技術者志望

谷川 康治 ✓



私がエンジニアになろうと、思ったのは中学2年生の頃だったように記憶しています。本州と四国を結ぶ橋を架けたり、鉄腕アトムより優秀なロボットを造りたい、と云った大きな夢、カッコ良い夢に胸を張らせて技術者志望をしたのではなく、自分自身の性格が短気であるため、人にものを教えたり、人との接触到不向であろうと、自分なり

に考え、それであれば機械を相手にできる技術者になろうと、考えたのが技術者志望の動機であった。その後は、技術者志望だけが私の心の中で顕在化していったようです。

昭和40年代の初めであったためか、入社当初より何かガムシャラに仕事をしてきたようである、技術者の仕事とは、このようなものであるのだとも、何とも感じずに、たゞガムシャラに過していた、がある時、ふと気が付いてみると、装置、機械、器具、図面といったものとの付合よりも人と係りあって仕事をしている時間の方が多いのである。

何故だろうか、問うまでもなかった。世の中はどのような装置を欲しているのだろうか、どのようにすれば使い易いであろうか、安全性をもっと高められないだろうか、何とかもっと安く製作できないであろうか、この装置はもっと多くの用途はないであろうか、などメーカーの技術者として当然考えることは、皆な、人との係りで考えなければならないことばかりであるからである。機械あるいは図面だけを相手にしては、私の仕事は全くできなかったのである。

中学時代の技術者志望の動機と大きな隔たりである。私の中学時代の動機が如何に幼稚であったかは、明白なことである。

人との係りを避けた技術者が生み出した技術、人に背を向けた技術者が生み出した技術、人を忘れた技術者が生み出した技術は世の中に長く存続しないのは誰もが知るところである。技術は、生み出した技術者の思想が必ず反映されており、また、ものによっては思想そのものである。コンピュータ、ロボットが多分野で使用されている昨今であるが、既に人間との調和、共存が真剣に論議され始められているのを見聞きし、同感をいただき、一人頷いている次第である。

(応物・昭和41年卒・日本ジャーレルアッシュ(株)・技術部次長)

卒業11年……

上道 俊和



ましてクラスの諸氏の様子などをお伝えできる状態ではないので、同窓の皆様にはお詫びしたいところです。

さて、私も学校を卒業してから、10年と少しになり、

同窓会報に投稿依頼を頂いたが、メ切を過ぎて、あわてて、筆を走らせている次第です。同窓会の評議員をやらせて頂いていますが、日頃は忙しさにまかせ、これといった活動をすることもなく、同窓会へ顔を出すこともあまりせず、

ましてクラスの諸氏の様子などをお伝えできる状態ではないので、同窓の皆様にはお詫びしたいところです。

さて、私も学校を卒業してから、10年と少しになり、

大学時代とクラス会

森下 勉



大学はデモ・デモ、「我々わあー、我々のおー」「異義なーし」「ナンセンス」の声があちこちで聞かれるという具合で、クラスでも討論が行なわれておりましたが、その

えー、一席御機嫌をお伺い申し上げます。

早いもので、もう卒業してから11年になりますねやが、我々の大学時代と申しますと大学紛争の最中でして、とりあえず三回生になったものの専門の授業はない、大

いい年となりましたが、同窓の皆様も結婚して子供も2人ぐらいいき、いい“おっさん”となっていることでしょう。10年の間には、社会情勢においても、オイルショック、高度成長から低成長へ、老令化社会の到来などといろいろな変化もありましたが、学生時代の時間に比べて、全くあつという間の時間であったようです。

会社での仕事は、照明器具の開発をずっとやっておりますが、商品開発の仕事は研究的な仕事と違ったまた別な難かしさもあるんですよ。今の商品、本当に品質にも秀れ、デザインのよいものがゴロゴロしています。それだけ現代の人々はデザインにも敏感であり、よいものでないと買わなくなりました。最近“感性”という言葉がさかんに使われていますが、感性ということについて、ちょっと一言。

感性とはなんぞやというと、見るとか、聞くとか、触るとかにおいて、美しいとか快いと感じる、感じさせることという感覚的なものでしょうが、感性をもった物を創るとなると、そのものづくり方のこと、性能とか品質とかの技術的なこと、創る側としての考え方のトータルなものの具現となるわけで、感性と工学がうまく融合していることが、大切となるわけです。商品を実像とすれば、人々はその商品のイメージとか雰囲気といった虚像もいっしょに買おうとしているわけで、その虚像がしっかりしている（ちょっと変ないい方ですが）ことが、現代の商品には要求されているんですよ。感性というのは、感覚的なことだけでなく、その裏付けを含めての事になると、創る側としてはなかなか大変なのですが、これからの技術屋さんには広い意味での感性をもっと磨けということになるのではないのでしょうか。

同窓諸氏の方々、一度同窓会でも開けというなら、連絡ください。お待ちしております。

(機械 昭和46年卒、松下電工(株)照明事業部商品開発部)

独り言

米田 正博



先日、渡良瀬川沿いに走る国鉄・足尾線に乗って終着駅・間藤を訪れた。黒いトタン屋根の民家や左右から迫ってくる赤茶けた山肌のながめと、ポツンと取り残されたひと気のない駅舎とは、ジャーナリズムにも公害の原点と騒がれているが、実に異様な光景である。鉱毒にただれた裸山の谷間に、足尾の町はすり鉢の底に沈んだように広がっているのである。

私が大学を卒業して6年の月日が流れた。今その4年間をふり返る中で、何を学んだかといわれると疑問が残るが、現在の私の考え方の基本にあるのは、あの4年間である。私の大学時代1972～76年は市大工学部紛争のその中にあり、暑い日が続いていた。その中で問われていたのは、科学は社会に対していかにあるべきかであり、そしてその中で大学の存在意味であり、化学専攻の私には、それは現実問題としての公害であった。

奈良県に就職した私は、行政・研究の両面から、主に水質問題を通して現実の公害と直面した。水質汚濁・トップレベルの大和川を前にする時、現代社会の全ての問題点をはらみながら、流れているようである。その浄化の可能性については、かつての巨大・画一的なものではなく、小型でもその土地の自然・社会条件に即した技術を用いるなら—それは多分かなり初歩的なものの組み合わせで、誰にもわかるもの、誰にでもできるものであり、いわば等身大の科学になるように思われる一画は開けてくるとはではないか。

大学時代問われたことに対して、その解答をまだ出すことができない。渡良瀬川の流れを見るとき、それは私にとって、おそらく一生かかっていた宿題のように思えた。

(応化、昭和51年卒、奈良県衛生研究所)

近況報告

長谷川良一



なく思っています。

私が入社して最初に担当した仕事は“ガス管の防食”



うち機動隊ははいつてくるは、ヘリコプターは飛んでくるは、本館に水をかけるはで時計台もさっぱりワヤになってしても紛争も一段落。

さあ、それからがえらいことで、「勉強、勉強(?)、レポート、レポート」で四回生、今度は就職ということで皆試験を受けにいったんですが、なんせ専門の単位が少ないでつきかね、会社の人事の人なんか、卒業できんのかいなあという心配そうな顔つきで、我々の方が大きな顔して受けてきたもんです。就職がきまると「次は卒研、はい論文」と専門の勉強どれだけやったんかいなあ?—とってるのは私だけで名譽のためにつけ加えておきますが、よう勉強したはる人もいました—というるうちに卒業。

そんな同期の仲間も今では立派にそれぞれの職場で活躍したはりますが、その様子をクラス会で聞くのが楽しみです。卒業の年には山口氏が幹事、そのあと私が幹事というよりは、案内状を出すだけの係で何の趣向もございませんが毎年同じ日、同じ場所で集まって世間話をしております。その名も「上方世間話の会」と申します。おかげさんで10年たった今も12～13人の仲間が集まっております。写真は昨年のクラス会のものですが、中でも勝川氏は、ホノルルマラソンで3時間46分の好タイムで完走されました。

私は卒業後も大学へよく行きますが、その時にはクラブ(落語研究会—これがこのけったいな文体をかく私の正体)へ顔を出したり、研究室へおじゃまを—ほんまにじゃま者やったりして—しております。此頃は先生方からマイコンのことなど教えていただいたりしておりますが、皆さんも一べん研究室を訪ねるとええんやないかと思ひます。これからも先生方はじめ、同期、同窓の皆さんとのつながりを大切にしていきたいと思っております。今日此頃でございます。(電気、昭和46年卒、学習塾経営)

で、大阪層群の海性粘土中に埋設したガス管の腐食速度が他地域に比べ非常に大きいため、その研究と対策を行なうものでした。大阪層群のmarine clayの力学特性は大学時代によく論議したものでしたが、これが腐食の元凶となっているとは思いませんでした。なぜ激しい腐食が起きるのか？パイプラインが粘土層、砂層など様々な土質の層を通過するために電池を形成すると簡単には言えますが、現在腐食場所、腐食深さ、腐食スピード等を予測することは至難の業で、土の種々のファクターと腐食との相関も求められません。この仕事を通じ、土というものを力学一辺倒ではなく別の方向からながめられるようになりました。

次に担当した仕事はガス管敷設の設計業務で現在に至っています。一定の受持地区内のガス管敷設の設計図をすべて作成するものです。橋梁管、押抜等の特殊設計もありますが、通常ガス管の埋設深度は深くても2m位で土質定数を求めてそれを設計に生かすということはほとんどなく、私の腕の見せどころを今か今かと待っている次第です。この仕事では役所との折衝、地元との交渉、その他諸々のどんな文献にも出ていない生の対人関係を学び、何事にもかえられない貴重な経験をしました。

この前の盆休みに久しぶりに級友数人と梅田で会い、酒を飲みながら現在の仕事についていろいろと語り合いました。官庁、ゼネコン、等様々の職場で、本当に多種多様な仕事にみんな精一杯打ちこんでいるようで、話を聞いていて「しっかりした技術屋になってきたなあ。」と感ぜずにはられません。私は端から見てどの様に見えるでしょうか。私を感じたように感じてくれるでしょうか。みんなに負けないようにしなくては……。これより先何回となく所属をかわり、違った仕事をしなくてはならないと思いますが、何事にもチャレンジしてオールマイティな技術者になりたいと思っています。

(土木、昭和51年卒、大阪ガス(株)南西部導管事業所建設第1グループ)

織の中で個人に責任を負わされ、どれだけの働きが出来るものか疑問である。

私は某電器メーカーに就職を希望する者であるが、まだ学生で時代の最先端にいるわけでも無く先行きの予想など私がたてられるものでも無いが自分なりに思う所を綴ってみたいと思う。

まず政治、経済であるがこれについてはいやはや恥かしい事で全く皆目わかっておられない故、先行きの見どころか現状の説明さえも満足に出来ない状態である。

科学技術の予想であるが、ここ数年の内にエレクトロニクスに関する技術が格段の進歩を見せ、今やまさにエレクトロニクス時代である。さらにセラミックなどの新素材も注目を集めておりエレクトロニクスとメカニクスを合わせてメカトロニクスなどと呼ばれている様である。それらの恩恵かパソコンなどもかなり安くなり今の4回生は半数近くが個人で所有していると聞く。

さて肝心のこれからの予想であるがエレクトロニクスが今以上に様々な分野で様々な形で必要とされ益々複合化した分野が増えて来るであろう。これまでは機械科と言えど多少の他の知識は必要としても機械のエキスパートであれば良かった。しかしこれからはそれだけでは駄目で機械と電気、あるいは機械と化学と言った様な2つ以上の分野の知識を併せ持っている事が技術者の必要条件となって行くであろう。しかしあるいは極度の細分化によって狭い所でのエキスパートが誕生するかも知れない。はたしてどうなって行くのであろう。ただかつては10年周期であった技術革新が今や1年あるいは早い物では半年周期で行なわれている事は事実である。であるから、これからの技術者は様々な分野の知識を広く吸収し絶えず時代の最先端に目を向け研究して行く必要が有るといふ事だけは言えそうである。以上来年就職の立場に有って今学生として思う事を述べてみた。

(機械、昭和56年卒、大学院、機械工学専攻)

就職を控えて思う事

松吉 徹也



大学学部生として4年間、大学院生として1年半、大学に入ってからすでに5年半の歳月が過ぎようとしている。学生としての生活も残す所約半年、いよいよ来年からは社会人として世間の荒波にもまれながら生きて行くのかと思うと少なからず心の緊張を感じる。アルバイトなどで多少の社会勉強をしているとは言え、それさえもアルバイトという責任の軽い立場、はたして企業という大きな組

二つの柱

梅田 尚



現在、私は大学院に在籍しておりますが、学部からあわせると六年近くもこの市大に通っているわけです。でも、今ふり返ってみますとアッという間に過ぎさった思いです。

さて、社会に目を向けてみますと混迷を深めており、ある一部の業種を除いてほとんどの業種が不況にあえいでおりますが、その中で技術革新

の時代であるといわれています。このような中でこれからの技術者、研究者にかかる期待は大きいようです。我々もその一翼を担うようにがんばりたいものです。

ところで、学部、院を通じていろいろな事がありましたが、総じてふり返ってみますと、恵まれた生活を送ることができ、充実していたと思います。その中でも私にとりましては、大きな思い出の柱となっておりますのは、学部の時のクラブ生活、それから学部四年からの研究生生活であります。私は、この市大で偶然ともいえる状況からボート部に入部しました。ここから私の大学生活は、当初予想していたものから大きく変わりました。学部の3年までは、大半の時間がクラブに費やされました。苦しい事もたびたびありましたが、何とか最後までやり尽くしたことは私に強い自信を与えてくれました。また、長期間に渡る合宿を通じて、他の友人とは一味違う親友もつくることができました。三年の秋で私は、現役を降りましたが、その後は、マネージャーと研究とを兼ねる生活にはいりました。実験は好きでありましたが、私は非常なる不器用で、先生には迷惑のかけっぱなしでありました。研究テーマが非常に興味あるものであったので、私は実験に飽きることは皆目なく、ほとんど毎日研究室に通いました。むろん今もです。その中で先生から研究者の心構え、考え方を知らず知らずのうちにくみ取ったような気が致しております。この2つの柱は、私が社会に出てからの大きな支えとなると思っております。

(応化、昭和56年卒、大学院、応用化学専攻)

思いつくままに



小西 浩夫

私が学部を卒業して早や一年半が過ぎようとする頃、同窓会より会報への投稿の依頼があり、色々迷ったあげく学部の頃の印象や最近感じていること等をまじえて綴ってみようと思う。

建築学科の教養は比較的授業も少なく、いきおいクラブや遊びに精を出していました。建築関係の授業も教養には数える程しか下りてきておらず、教養の2年間は本当に建築学科に入学したんだろうかと思える日々でした。その反面、専門は毎日が緊張感と疲労感の連続(と言っても余裕はありましたが)でハードなカリキュラムに無条件にのめり込んでいました。そして気がついてみると何を修得したのだろうかという気がしたものでした。

しかし、そういう気持ちになったことも最近になってわかるようになってきました。というのは大学院に入学し

て勉強が学部の頃とがらりと変わったからである。学部の頃は前で触れたように決められたカリキュラムをこなすのに精一杯で、いわゆる押しつけられた勉強という感が強く、自らが問題意識を持って臨んでいたとは言えなかった。一方、現在は自らが設定した研究テーマに沿って文献をあさり、先生に指導を仰ぐという精神的に負担にはなるが、充実したものを感じています。また一般教養のなさを悔み、学部の頃の勉強不足を後悔している此の頃である。

話がかたくなってしまったが、話題をがらりと変えて、同窓会について述べてみよう。我が都市計画研究室(三輪研)では10月9日(9月18日現在)に昭和47年度卒業研究のOBを主体としてゼミ同窓会を催すことになっています。一般に、同窓会と言えば同期の者同志で開くことが多いものですが、縦のつながりによる同窓会もこれを機会にちよくちよくやるべきだなと感じています。

さて、とりとめもなく書いてきましたが最後に、我が同期生もちらほらと結婚・婚約の話が聞かれるようになってきました。もうそんな時期かなと思いつつ、時は確実に歩を進めているようです。

そして、最後の最後に結びの言葉が来るのですが、それは今後の宿題とします。

(建築、昭和56年卒、大学院、建築学専攻)

私の望む技術者像

安藤 亨



石油ショック以来、日本経済は多少持ち直したものの、依然として低迷の一途をたどっている。

とはいえ、今年の就職戦線を眺めると、情報産業、ロボット工学、生命科学等を中心に理工系の採用は好調のようである。

さらに、従来では考えられなかった業種(銀行・商社等)への理工系出身者の進出が望まれている。

高度成長期の技術者万能の時代が再現するのであろうか。

一時は公害問題等で技術者受難の時代があったではないか。

現在、技術者に寄せられる期待は何であるか。この期待像に私の望む技術者像を重ね合わせて、若干の私見を述べたいと思う。

まず、今や情報の時代に入り、価値観の多様化と相まって、現代社会が一層複雑さを増しているという現実眼をむけなければならない。

機構の複雑さに対処するために必要とされるものは、

意思決定から、生産過程、供給（販売）に至るシステムティックな思考方法であろう。

技術者のすべてがこの思考方法を備えているとは思われないが、今のところ少なくとも一番近い思考ができる人種とみなされているのではないだろうか。

次に、日進月歩の技術革新が経済に及ぼす影響は益々大きくなっているという現実がある。

企業の命運も新技術、新アイデアの開発にかかっている。

というのは、通常の生活で必要なものがほぼ出つくした観のある現代社会では、新たな需要層の発掘を伴うことができる独創性に富んだ技術の開発が望まれるからである。

このために一分野だけにこだわらないT型人間、 π 型人間の技術者が必要とされているように感じる。

以上のように、社会の技術者に寄せる期待は、新たな意味合いを持って高まっているといえよう。

市大での6年間、怠惰な生活を送ってきた私ではあるが、それでもこれからの人生にとって指針となるようなものを吸収してきたように思う。

それは幾らか身についた専門分野の知識ではなく、暗中模索の研究などを通じて、上述した技術者像に至る道筋を読みとることができるようになったということである。

しかし、これも所詮、机上の空論に過ぎず、あと数ヶ月に迫った卒業を前にして、新たに心を引き締めなければならぬと痛感する今日この頃である。

（土木、昭和56年卒、大学院、土木工学専攻）

“学長および後援会理事長から
創立百周年募金ご支援各位へ”

昭和57年9月、下記のお礼状が事務局に届いておりますのでここに掲載いたします。

ますますご健勝のこととおよろこび申し上げます。

さて、大阪市立大学の創立百年を記念して計画されました事業の資金とするため、昭和54年に始めました募金事業は、皆様方の絶大なご支援を得まして、このたび当初目標額をはるかに超えて8億4千7百万円に達する成果をあげることができました。

一方、記念事業は、昭和55年に記念式典を無事盛大に挙行了のはじめ、昭和57年秋にオープンの大阪市立大学文化交流センター（当初名称：大阪市立大学市民文化センター）等、順調に進捗いたしております。

ここに募金活動を終るに当りまして、皆様方の温いご支援に心から感謝いたしますとともに、今後ともご支援ご鞭撻を賜りますよう切にお願い申し上げます。

おつて、いちいち拝眉のうえお礼申し上げるべきところでございますが、略儀ながら、誌上をおかりいたしまして、ごあいさつ申し上げます。

昭和57年9月

大阪市立大学長 木村 英一
（勲）大阪大後援会理事長 平井常次郎

事務局年報

（'81・11・1～'82・10・末）

'81年11月…岡本修夫（建築24年卒）評議員ご逝去、当会より弔電・献花（24日）。

'81年12月…同窓会報第2号完成・発送（5～11日）。
大阪市立大学同窓会連合会の理事会が、大阪倶楽部にて開催され当会々長（代理）出席（11日）。

'82年3月…昭和57年度の学部・大学院合格者に会則および案内状を配布。学部主催の送別式および卒業祝賀小宴（24日）に会長他理事が出席。竹屋芳夫、北浜安夫両教授が定年退職され名誉教授になられる。

'82年4月…新制大阪市立大学の卒業制のみによる全学的同窓会の創立の件で、高橋和利（商28年卒）氏が当会へ協力要請現理事の意向を打診するも具体的検討は保留中。〔注〕：主旨は「多くの職域での市大卒業生としての学部を越えた結びつきをバックアップできる全市大卒業生の組織を創設する」ことのように、高橋氏の他に、永野和成（大阪市経済局長・商28年卒）原田 学（理学

部教授・理28年卒）佐藤全弘（文学部教授・文28年卒）、山形休司（商学部教授・商28年卒）、多田吉二（生活科学部助教授・家29年卒）、および藤森貢（医学部教授・医30年卒）等による第一回目の意見交換（当会には連絡なし）では主旨実現に努力することで一致したとのこと〕

'82年6月…都土六木会（トドロキ会）が当会々費等の完納促進を組織的に展開。（別項参照）

'82年8月…古市亮藏名誉教授ご逝去、当会より機械工学科理事が会長代理で出席献花（11日） 会報第3号編集委員会が発足し編集方針等を決定（17日）

'82年10月…第2回会報編集委員会にて編集案作成（8日）第5期第3回理事会は会報第3号の編集委員会案をほぼ原案通り了承、第3回評議員会の'83年2月5日（土）開催を決定（16日）。

創立100周年記念事業の一つとして計画されていた「大阪市立大学文化交流センター」が大阪駅前第三ビル内に設置され、16日の開設披露式には当会の会長、副会長も出席。

役員名簿 (任期昭和57年12月末)

会長 井田 憲治 (土木30) 副会長 高田 満 (電気22)
 理事 東田 和郎 (機械20) 塩山 正治 (電気23) 坂内 幾男 (建築24) 中島 弘 (電気25)
 大橋 岩男 (土木25) 井口 悌三 (応化28) 入見 宗男 (機械31) 大橋 邦夫 (応化32)
 多胡 進 (建築34) 中井 博 (土木34) 北田 忠義 (応物36) 西村 昂 (土木36)
 田守 芳勝 (応物38) 岡本 次郎 (電修39) 南斎 征夫 (機械39) 玉垣 誠三 (応化39)
 石黒 英治 (応物40) 東 恒雄 (機械41) 倉田 克彦 (土木42) 赤埜 弘平 (建築45)
 南 繁行 (電気45) 大嶋 寛 (応化49) 茶谷 修治 (応物50)
 監事 保坂 博通 (応物34)

評議員

卒業	機 械	電 気	応 化	建 築	土 木	応 物
20	宝力 良 幸	安藤 慶 一	—	高野 晃 嗣	能城 正 治	—
22	藏田 廣 造	—	—	村井 健 三	別所 武 雄	—
23	嶋田 定	山田 悦 三	—	西川 幸之輔	岡 正 一	—
24	—	金田 弥 吉	—	—	植木 正 富	—
25	葉田 喜一郎	安藤 周 二	—	大東 清 四	生島 一 成	—
26	—	太田 鉄 造	—	小河 一真佐	名越 孝	—
28	中川 晴 夫	橋本 賢 一	岡本 由 之	福田 充 宏	—	—
29	日枝 仁 郎	立石 浩 二	田岡 二 郎	—	田井戸 米 好	—
30	杉浦 重 光	金田 幸 雄	岩井 武 彦	田口 泰 三	豊田 敏	—
31	秋山 高 治	壺井 芳 昭	小林 辰 一	安藤 昌 範	嶋 経 夫	—
32	岩井 宣 雄	加藤 隆 三	木下 雅 悦	長町 守 康	吉村 憬	上野 敦
33	小西 峻 二	細川 省 一	福村 吉 晃	内藤 徹 男	高 端 宏 直	薩摩 逸 雄
34	久門 輝 正	小西 陽 雄	上原 敏 男	木村 久 夫	山崎 真喜雄	西田 新
35	川越 浩	石田 喬 重	梶 章	小島 弘	上田 伸 三	粟根 克 昶
36	小川 次 夫	塩飽 弘	中出 伸 一	溝神 宏至朗	園田 恵一郎	村上 宏 仁
37	尾崎 俊 夫	高下 照 久	近藤 絃 一	八木 勝	西垣 好 彦	西村 宏 之
38	河内 秀 二	森下 昂	浅岡 力 夫	有光 友 興	小田 一 紀	嶋谷 義 隆
39	土井 紀 宏	当麻 円 雄	渡辺 隆 夫	木本 英 爾	高田 直 俊	室野 片 山
40	小川 健 一	倉田 一 之	五百井 正 樹	浅野 誠	山田 優	片山 逸 雄
41	溝口 進	森井 征 治	山口 英 昌	貴志 義 昭	湊 勝比古	奥田 賢 三
42	村田 一 夫	片岡 二 郎	三浦 洋 三	坂 寿 二	望月 秋 利	八木 邦 夫
43	木村 義 弘	坪香 英 一	伊木 義 雄	荒木 弘	北田 俊 行	堀内 泰 男
44	松下 義 治	山本 正 樹	谷本 高 敏	大倉 良 司	角野 昇 八	萬代 信 司
45	七條 徳 成	梅本 伸 作	鈴木 晃	久保田 弘 昭	小林 治 俊	和倉 永 良
46	上道 俊 和	森下 勉	山田 悟	大西 康 雄	伊藤 忠 章	藤井 修 一
47	岡本 利 一	赤木 利 行	吉田 育 義	三宅 良 一	山本 修 章	田中 義 英
48	辻本 良 秀	河合 寿 夫	林 正 博	井上 清 司	岸田 全 玄	岩井 健 優
49	三木 健 一	広瀬 義 晃	西田 隆 仁	国田 幸 雄	谷 俊 寛	小森 敏 朗
50	中野 康 夫	金沢 勝 己	門脇 敏 夫	北野 博 己	黒山 泰 弘	小平 松 敏 朗
51	坪倉 由 明	前谷 治 男	米田 正 博	岡崎 道 晴	長谷川 良 一	南口 栄 志
52	山中 朗	寺井 賢 一	大屋 尚 洋	中佐 一 重	松本 博 司	太田 豊 治
53	伊崎 修	三上 明 義	親木 康 高	田中 三 郎	奥村 彰 一	末 国 克 己
54	芦田 史 寛	松下 行 雄	中川 弘	伊勢 莊 一	富岡 健 一	川口 和 亨
55	大山 寛 彦	串坂 徹 臣	加柴 莊 尚	永島 敏 朗	川口 和 亨	真鍋 幸 一郎
56	松吉 徹 也	向井 博 裕	梅田 尚 司	小西 浩 夫	安藤 真 一	山本 弘
57	前原 克 彦	田 邨 裕 幸	鈴木 健	高 永 寿	高橋 真 一	山本 弘

終身会費をお払込み願います!!

ご承知の通り、当会の運営資金は主に終身会費に依存しています。まだ未完納の方は早急にお払込み下さいませようをお願い致します。

なお、ご送金は下記のいずれかの方法をご利用下さい。

① 郵便振替

加入者名：大阪市立大学工学部同窓会

口座番号：大阪 3-12741

② 郵便現金書留

③ 住友銀行

(この場合は事前にご連絡下さい)

昭和54年3月までにご卒業の正会員の方で、かつ昭和55年12月15日を期日とする臨時措置の要請状がなかった方の場合は、払込み額を当会事務局へお問い合わせ下さるようお願い申し上げます。

都市六木会が会費の払込みを促進!!

多分ご存じのない方が多いと思いますが、旧制大阪市立都島工業専門学校の土木学科をご卒業になった当会々員方々が、都市六木会(トドロキ会)と云う同窓会を組織されております。

この度、この都市六木会では、昭和57年6月現在未納でありました同会々員の当工学部同窓会費(臨時協力金も含む)の至急払込みにつきまして、組織的な呼びかけを展開して下さいました。その結果、本年9月末時点での都市六木会員の会費払込率は、約70%という高率に達しました。事務局といたしましては、このように自主的な会費払込み促進行動の展開はまことに有難く、この度ご協力下さいました都市六木会所属の会員各位に感謝申し上げます。ご支援有難うございました。

＝ご住所・お勤め先の変更連絡のお願い＝

当会は、昭和54年以降毎年、会報または会員名簿を発行してきました。そして、昭和58年12月上旬には第5号の会員名簿を予約配布する予定です。会員各位のご住所やお勤め先の正しい情報が同窓生に伝達できるようにしたいと考えておりますので、変更のあった際には、事務局まで早急にご連絡下さるようお願い致します。なお、同期評議員の方にもご連絡の程、重ねてお願い致します。

この同窓会だよりの「新しい名称」を募集

します。事務局へハガキでご一報下さい!!

編集後記

今年も同窓会報(第3号)をお届けすることができました。今年は「きなき臭い、ニュースに明け暮れたような気がしますが、皆様方にとっては如何な年でしたでしょうか。

本会報の会員通信は面白い読物だと思えますが、如何なものでしょう。外国に於て活躍されている方からの便りを読んで頼もしく思い、充分経験を積んだ方の言葉になるほどと思い、クラス会便りあるいは若い人達の新鮮な感覚に接しては楽しんでおります。

なお、来年が都島工専の創立から数えて40年目に当たりますので、同校の卒業生の方々にはその時に原稿をお願いしようと考え、本年は原稿の依頼を行なわないことになりました。事情御賢察のうえ、御了承下さい。

工学部長ならびに各学科主任教授の方々には、お忙しい中を御寄稿いただきお礼申し上げます。

本会報が今後、会員諸氏の間の伝言板的な役割をも担えれば幸いと思っております。クラス会その他会員諸氏への連絡事項等をも御投稿下さい。

本会報に於てもお知らせしており、また新聞等の報道で御存知と思いますが、大阪駅前第三ビルの一角に“大阪市立大学文化交流センター”が、大阪市立大学創立百周年記念事業の1つとして設けられました。このセンターが、同窓会会員諸兄弟にとりまして、大学との間の、あるいは会員相互の間の交流の場として発展することを期待しております。

来年は今年以上に皆様方が活躍されんことをお祈りしております。

第3号会報編集委員

南齋征夫(機39)、南 繁行(電45)、大嶋 寛(化49)
赤埴弘平(建45)、倉田克彦(土42)、石黒英治(物40)
人見宗男(機31)